

平成11年度

市原市内遺跡発掘調査報告

稲^い 荷^な 台^{だい} 遺 跡

喜^き 多^た 仲^{なか} 台^{だい} 遺 跡

2000・3

市原市教育委員会

序 文

市原市は、温暖な気候と豊かな自然環境を背景に、有史以来多くの人々によって生活が営まれた地であり、国指定史跡の上総国分寺跡、上総国分尼寺跡をはじめとして、随所にその痕跡を見ることができます。

近年、一頃の開発ラッシュを思うと、その歩調は幾分緩やかになってまいりましたが、地域基盤の整備は今後も進むことが予想されます。その中で、いかに開発と文化財保護の調和をはかり、文化財を活用していくかは、今日の私たちに課せられた大きな責務であります。

本報告書は、開発によって失われていく市内所在遺跡について、国庫および県費の補助を受けて発掘調査を行った記録をまとめたものでありますが、本書が学術資料としてはもとより、より多くの方々が郷土の歴史への関心を高め、埋蔵文化財の保護と重要性を理解していただくための資料として、広く活用されることを願ってやみません。

最後となりましたが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、御指導・御協力いただきました文化庁、千葉県教育委員会、財団法人市原市文化財センターをはじめ関係諸機関各位に心より御礼申し上げます。

平成12年 3 月

市 原 市 教 育 委 員 会

教育長 大 野 咬

例 言

- 1 本書は、国庫および県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の委託により財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。
- 3 今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。
 - (1) 稲荷台遺跡（センター調査コード セ290）市原市山田橋3-4-11ほか
調 査 宅地造成工事に伴う調査で、対象面積719㎡について本調査を実施した。
調査期間 平成11年4月7日～平成11年5月11日
 - (2) 喜多仲台遺跡（センター調査コード セ305）市原市喜多567-1の一部ほか
調 査 土砂採取に伴う調査で、対象面積3,400㎡について340㎡の確認調査を実施した。
調査期間 平成11年8月30日～平成11年9月8日
- 4 本書の執筆は、鶴岡英一が担当した。

本 文 目 次

序 文

例 言

第1章 調査遺跡の位置と環境	1
第2章 稲荷台遺跡	2
第3章 喜多仲台遺跡	20

挿 図 目 次

調査遺跡の位置と環境	第10図 第9・10号竪穴住居跡・出土遺物 ...	11
第1図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡 ...	第11図 第10号竪穴住居跡出土遺物	12
稲荷台遺跡	第12図 第11号竪穴住居跡・出土遺物 ...	14
第2図 稲荷台遺跡周辺地形図	第13図 第12号竪穴住居跡・出土遺物 ...	15
第3図 稲荷台遺跡遺構配置図	第14図 第1・2号掘立柱建物跡・出土遺物 ...	16
第4図 第1号竪穴住居跡・出土遺物 ...	第15図 第1・2号土坑	17
第5図 第2号竪穴住居跡・出土遺物 ...	第16図 第1号古墳・第1号ピット	18
第6図 第3号竪穴住居跡・出土遺物 ...	第17図 遺構外出土の遺物	19
第7図 第4・5号竪穴住居跡・出土遺物 ...	喜多仲台遺跡	
第8図 第6号竪穴住居跡・出土遺物 ...	第18図 喜多仲台遺跡周辺地形図	20
第9図 第6・7・8号竪穴住居跡・出土遺物 ...	第19図 遺構配置図・出土遺物	21

図 版 目 次

図版1～3 稲荷台遺跡

図版4 喜多仲台遺跡

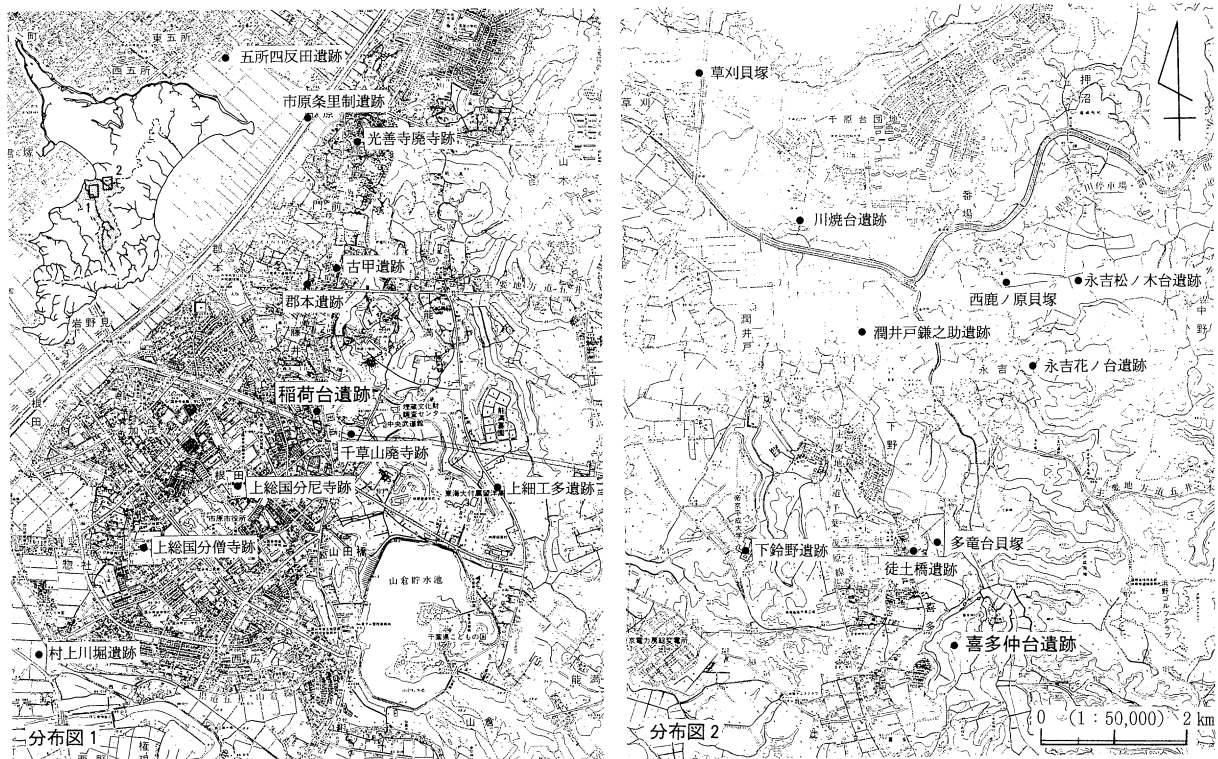
第 1 章 調査遺跡の位置と環境

稲荷台遺跡は市原市の北部に位置し、東京湾の海岸線から約 4 km 入った標高 28 m を測る通称「市原台地」上に立地する。稲荷台遺跡はこれまでに、国分寺台土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施されており、規則的に配置される掘立柱建物群や祭祀遺構、古代道が検出され、「貞観十七年」紀年銘墨書土器や多数の緑釉陶器が出土するなど、官衙の様相を示す遺跡として知られるほか、遺跡内に所在する稲荷台 1 号墳からは「王賜」銘鉄剣が出土しており、市原市を代表する遺跡である。

遺跡周辺には、古代の上総国を代表する遺跡が数多く所在しており、谷を挟んだ西側の台地上には上総国分僧寺跡・尼寺跡、遺跡北側には国府推定地のひとつである古甲遺跡や、市原郡衙推定地の郡本遺跡などがある。また、五所四反田遺跡・市原条里制遺跡・稲荷台遺跡からは、一連と見られる古代道が検出され、この道に沿うようにして官衙関連施設が展開していたものと考えられている。

喜多仲台遺跡は市原市の北東部に位置し、市津湖（長柄ダム）方面から北流して、村田川の中流域でこれと合流する支川村田川によって開析された標高 70 m を測る細長い舌状台地の平坦部に広がっている。喜多仲台遺跡はこれまでに、市道改良工事に伴う発掘調査が実施されており、平安時代を主体とする遺構が検出され、墨書土器のほか刀子・手鎌・紡錘車・鉄斧・釘・鏃・火打金・轡などの豊富な鉄製品、銅製の鈴が出土している。

遺跡周辺は、大規模開発の進む村田川下流域に比べ、調査例の少ない地域と言える。同時期の縄文時代中期の遺跡には、谷を挟んだ北側に位置する多竜台貝塚、村田川本流との合流点に位置する西鹿ノ原貝塚、村田川下流域で環状集落の草刈貝塚などがある。奈良・平安時代の遺跡としては、徒土橋遺跡、草刈遺跡のほか、近年の確認調査により、村田川本流と支流に挟まれた台地上にも永吉松ノ木台遺跡・永吉花ノ台遺跡など、当該期の遺構が存在することが明らかになってきている。



第 1 図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡

第2章 稲荷台遺跡

調査方法

今回の調査区は、国分寺台土地区画整理事業に伴い、昭和55・56年に調査が実施され、多数の掘立柱建物跡と祭祀遺構、紀年銘墨書土器や緑釉陶器が検出された稲荷台遺跡E地点に隣接する。

本調査は、重機による表土除去を行い、遺構は確認した順序に番号を付けた。遺構図面は、調査区内に設置した公共座標に基づく方眼杭を基準に、縮尺1/20ないし1/40で作成した。

なお、挿図・図版に使用した遺構番号は、整理作業の段階で調査時のものと変更している。また、遺跡の性格を考えた場合、竪穴構造の遺構を単純に住居跡と捉えることについて問題はあろうが、ここでは慣用となっている竪穴住居跡の用語を用いた。

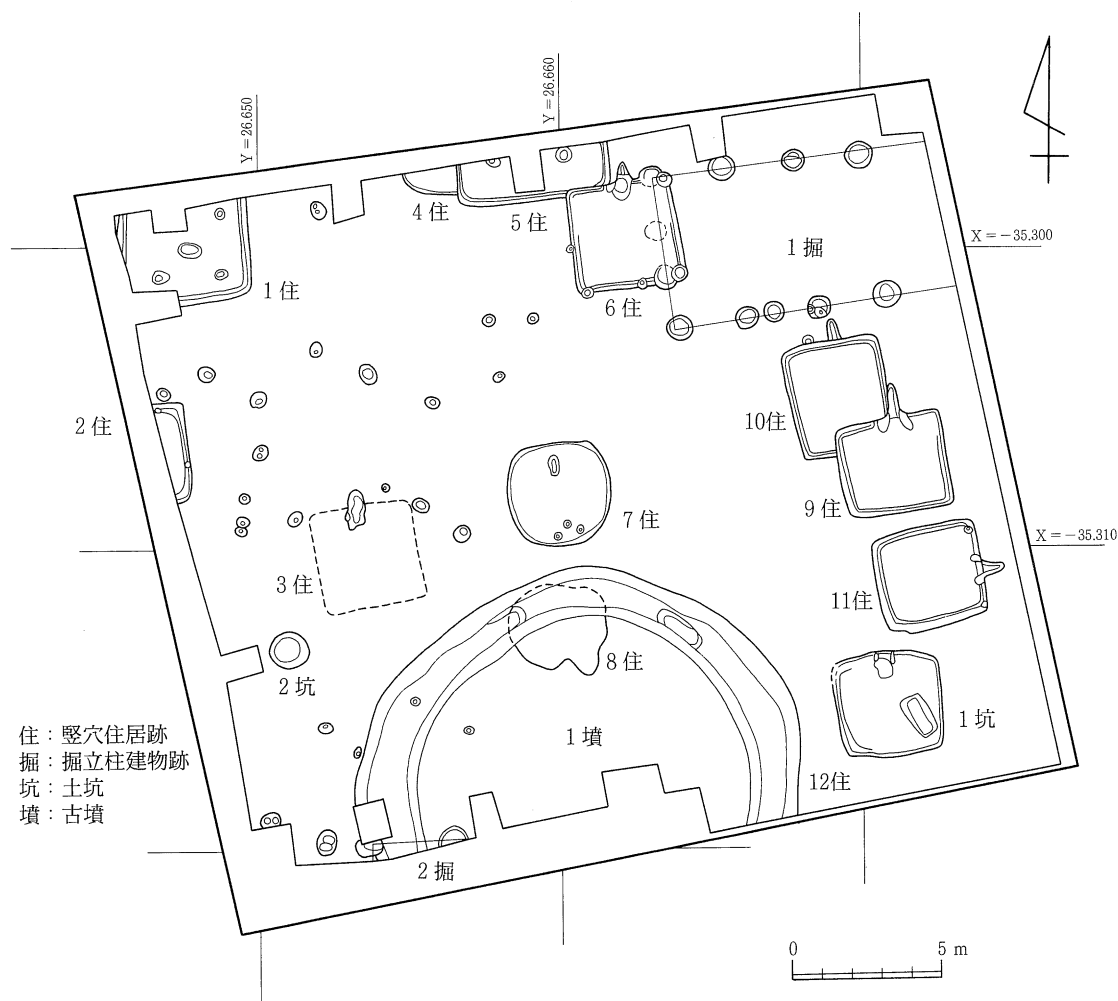
調査区における基本層序は、Ⅰ層表土、Ⅱa層暗褐色土、Ⅱc層黒褐色土、Ⅲ層ソフトロームである。調査区は西側に緩く傾斜しており、東側ではⅡc層は確認されなかった。



第2図 稲荷台遺跡周辺地形図

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代の土坑2基、弥生時代後期の竪穴住居跡2軒、古墳時代後期の円墳周溝1基、奈良・平安時代の竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡2棟、時期不明のピット群が検出された。



第3図 稲荷台遺跡遺構配置図

1 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (第4図)

調査時遺構番号 001号 遺存状況 北側は調査区域外となる。

位置 北西隅 規模 一辺4.2m程度・壁高0.3m 平面形態 方形

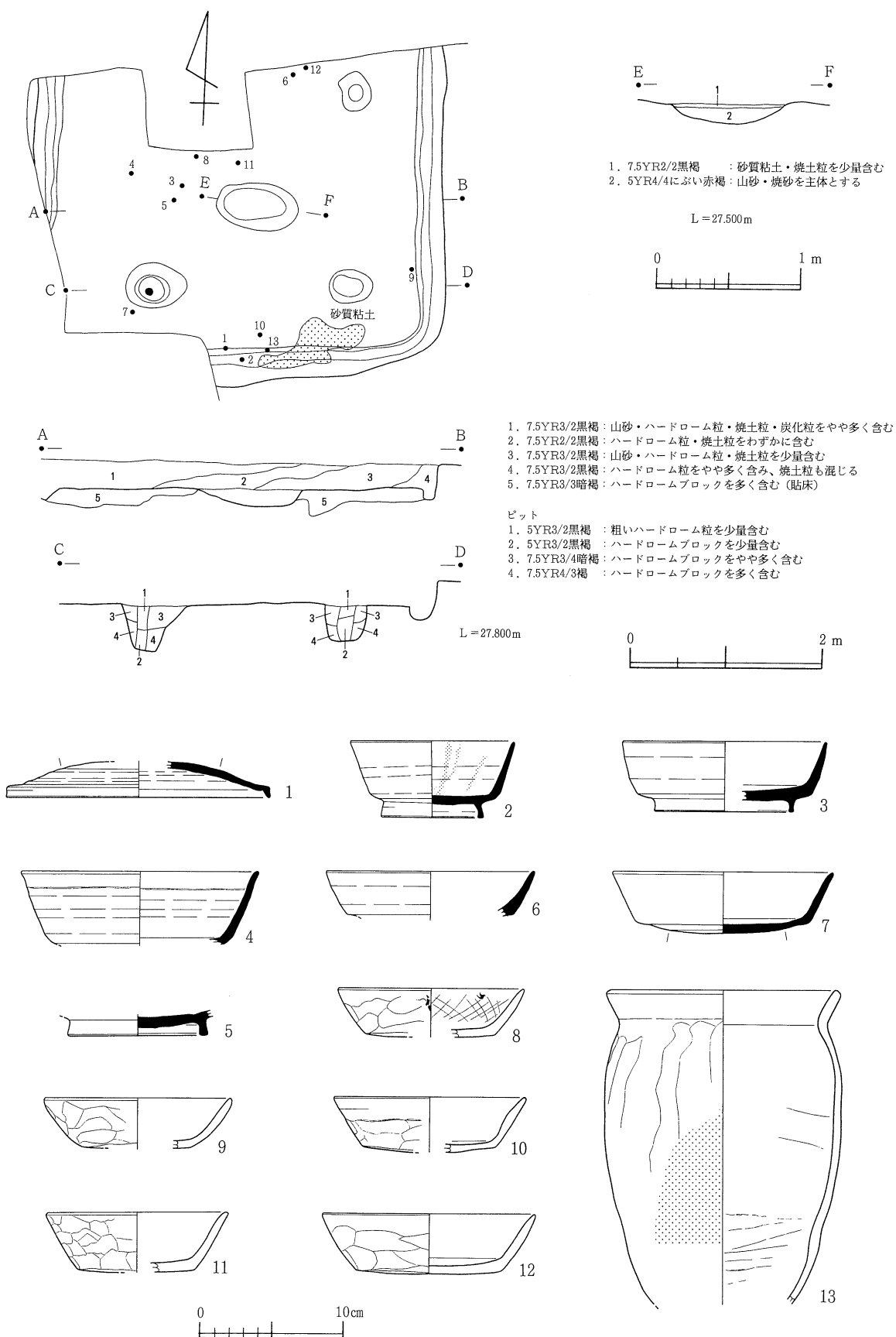
主軸方位 N-4°-W 周溝 幅6~12cm・深さ9~16cm

柱穴 平面楕円形・深さ32~51cmを測る支柱穴3本検出。

床面 ハードローム中にあり、貼り床。平坦で、全体に硬く踏み締められる。中央には82×48cm・深さ14cmを測り、山砂と焼砂を主体とする掘り込みが見られる。

カマド 砂質粘土の分布から、調査区域外となる北壁側と思われる。

遺物 覆土中層から下層にかけて、土師器・須恵器・灰釉陶器の破片が出土した。4と5は高台付杯で同一個体と思われる。8の杯は内面に斜格子状暗文が施され、部分的にススが付着する。8の甕の胴部には焼砂が付着する。3・8・13は床面、その他は覆土上~中層からの出土である。



第4図 第1号竪穴住居跡・出土遺物

第2号竪穴住居跡（第5図）

調査時遺構番号 002号 遺存状況 西側は調査区域外となる。

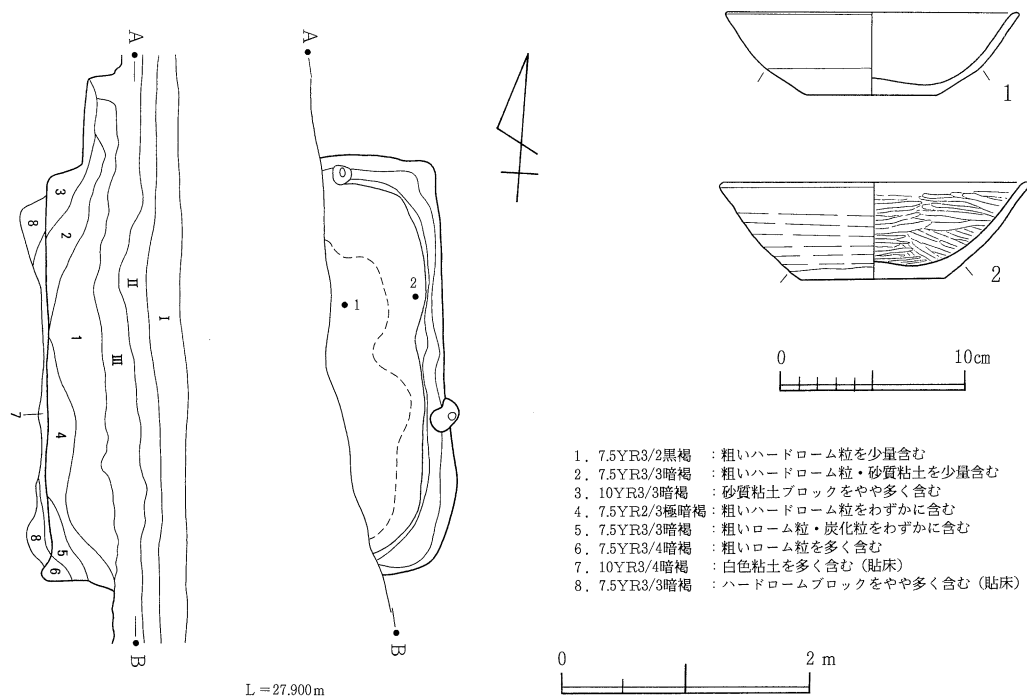
位置 中央西隅 規模 一辺3.3m程度・壁高0.34m 平面形態 方形

主軸方位 N-6°-W 周溝 幅4~12cm・深さ8~15cm 柱穴 検出されない。

床面 ハードローム中にあり、貼り床。貼り床は白色粘土を主体とし、平坦で硬く踏み締められる。

カマド 砂質粘土の混じる層が見られ、北壁側に位置するものと思われる。

遺物 図示した杯2点のみ出土した。1は胎土に雲母を多く含む。1は覆土上層、2は床面からの出土である。



第5図 第2号竪穴住居跡・出土遺物

第3号竪穴住居跡（第6図）

調査時遺構番号 003号 遺存状況 完存するが、掘り込み浅く、壁は不明瞭。

位置 中央西寄り 規模 一辺3.4m程度・壁高0.1m程度 平面形態 正方形

主軸方位 N-9°-W程度と思われる。 周溝・柱穴 検出されない。

床面 暗褐色土中にあり、貼り床。西側からはわずかに硬化する面が認められるが、総体的に軟弱。

カマド 北壁中央。遺存状態は悪く、左袖の痕跡がわずかに残存する。

遺物 カマド内を中心に出土する。6は移動式カマドの底部分の破片と思われる。1・3・4・5はカマド内、2は床面、6は覆土中からの出土である。

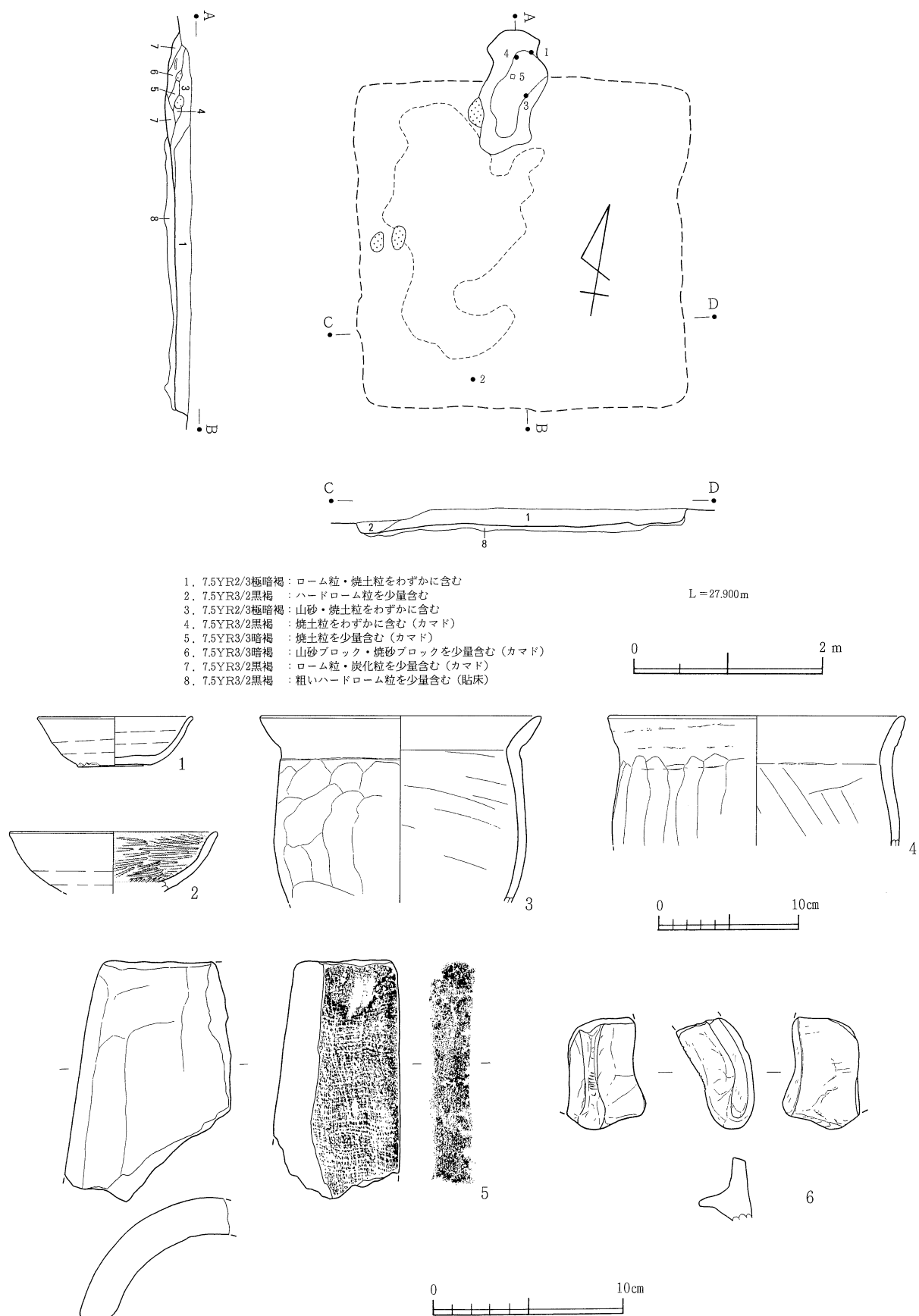
第4号竪穴住居跡（第7図）

調査時遺構番号 019号 遺存状況 第5号竪穴住居跡に切られ、北側は調査区域外となる。

位置 中央北隅 規模 不明・壁高0.34m 平面形態 楕円形

主軸方位 不明 周溝・柱穴・炉跡 検出されない。

床面 ハードローム中にあり、平坦でやや軟弱。また、わずかに炭化材の分布が見られた。



第6図 第3号竪穴住居跡・出土遺物

遺物 1は3条で構成されるS字状結節文の間に羽状縄文を充填し、無文部には赤彩がなされる壺の肩部破片で、覆土下層から出土した。

第5号竪穴住居跡（第7図）

調査時遺構番号 013号 **遺存状況** 第4・6号竪穴住居跡を切る。北側は調査区域外となる。

位置 中央北隅 **規模** 一辺5.0m程度・壁高0.44m **平面形態** 方形 **主軸方位** N-7°-W

周溝 幅6~16cm・深さ4~15cm **柱穴** 径53cm程度・深さ66~71cmを測る主柱穴2本検出。

床面 ハードローム中にあり、貼り床。平坦で、硬く踏み締められる。 **カマド** 検出されない。

遺物 東側に多く見られ、灰釉陶器の破片も覆土中層から出土した。3の杯は内面に広くススが付着し、燈明に用いられたものと思われる。底部には「懼」の墨書がなされるが、あるいは「懼（畏れる）」の書き損じであろうか。5は鋤子で両先端部を欠き、銹化が著しい。現存長58mm・幅7mm・厚さ2mm・重さ5.4gを測る。3は覆土下層、その他は覆土中層からの出土である。

第6号竪穴住居跡（第8・9図）

調査時遺構番号 014号 **遺存状況** 第5号竪穴住居跡・第1号掘立柱建物跡に切られる。

位置 中央北側 **規模** 一辺3.5m・深さ0.15m **平面形態** 正方形 **主軸方位** N-8°-W

周溝 幅4~8cm・深さ3~5cm。一部床面の掘りすぎにより検出されず。

柱穴 径20~40cm・深さ24~75cmを測る壁柱穴を検出。

床面 ソフトローム中にあり、貼り床。わずかに硬化する面が認められたが、総体的に軟弱。また、白色粘土・焼土とカガミガイを主体に構成される貝の分布が見られた。

カマド 北壁中央。遺存状態は悪く、左袖の基部と火床面のみ検出。

遺物 カマド内と最終埋没土である第1層中から、土師器・須恵器の破片が多く出土した。1・2は高盤で、同一個体と思われる。17・18は砂質粘土を用いた支脚で、丁寧に面取りされる。2・5・6が床面、16~18がカマド内からの出土。その他は覆土上~中層からの出土である。

備考 貝ブロックはカガミガイL32・R36、シオフキL2、ハマグリR1、マテガイL1、イボキサゴ2、ウミナ属1で構成される（集計可能個体のみ）。

第7号竪穴住居跡（第9図）

調査時遺構番号 020号 **遺存状況** 完存 **位置** 中央南寄り

規模 3.44×3.42m・壁高0.39m **平面形態** 楕円形 **主軸方位** N-11°-W

周溝 検出されない。 **柱穴** 径12~14cm・深さ10~15cm。三角形に配されるピット3本検出。

床面 ハードローム中にあり、平坦でやや軟弱。炉跡の両脇には僅かな硬化面が認められる。

炉跡 中央北寄り。72×33cm・深さ9cm。 **遺物** 出土していない。

第8号竪穴住居跡（第9図）

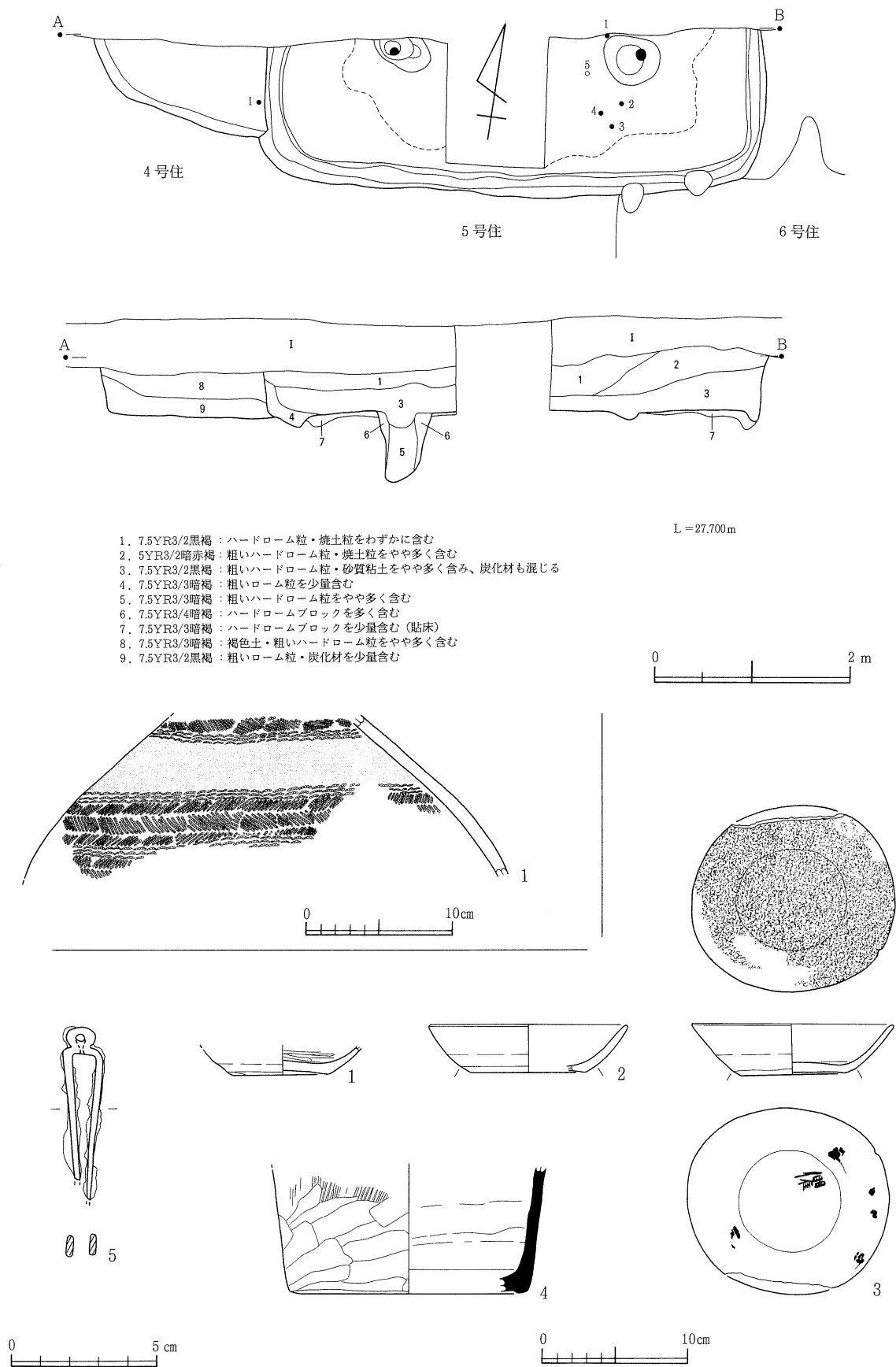
調査時遺構番号 015号 **遺存状況** 第1号古墳周溝覆土を切る。 **位置** 中央南寄り

規模 不明 **平面形態** 不明 **主軸方位** 不明 **周溝・柱穴・カマド** 検出されない。

床面 径3m程度の範囲に、わずかに硬化する焼土と炭の分布が見られる。

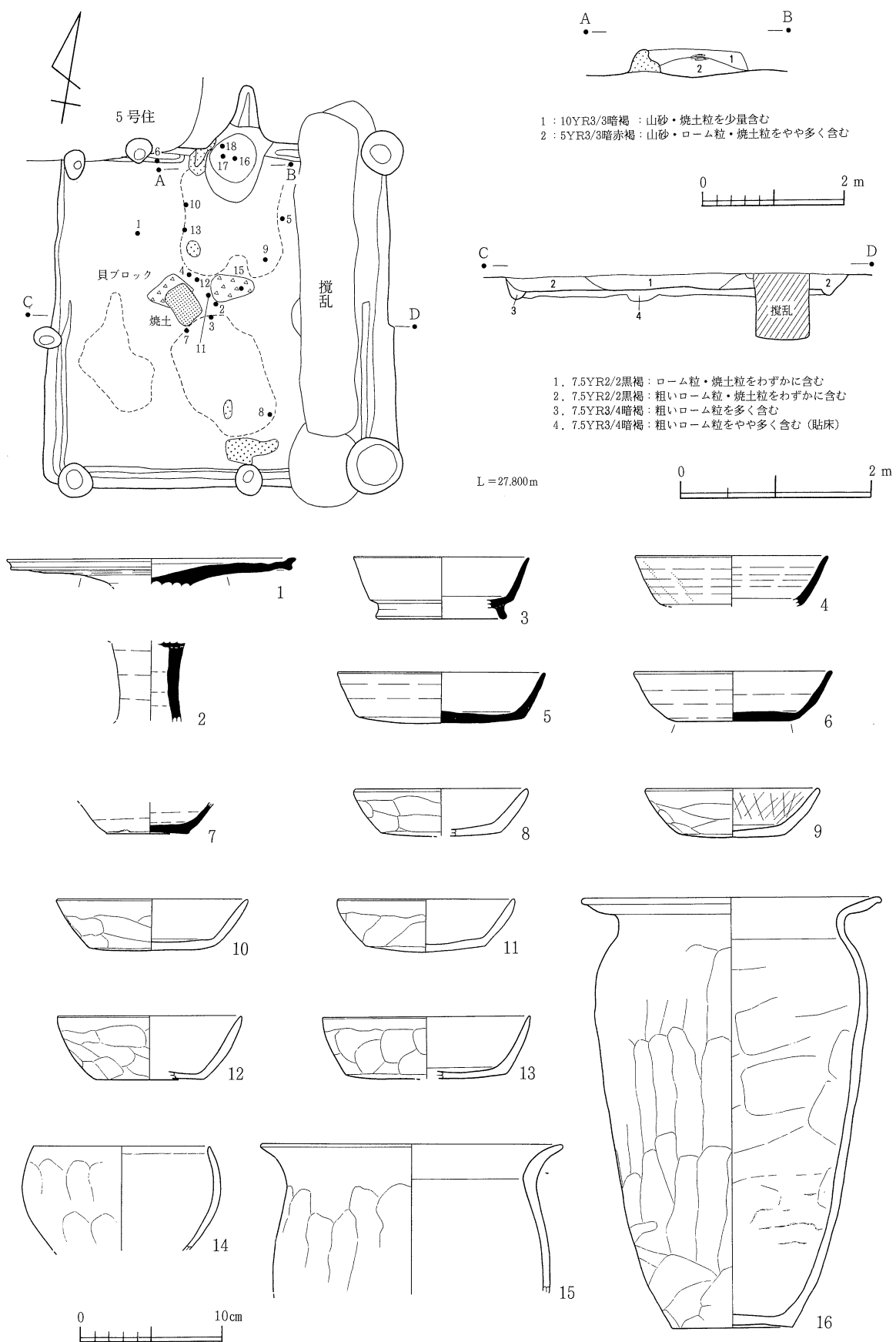
遺物 1の杯の他は、土師器の細片がわずかに出土するのみである。

備考 遺構の性格については不明である。先の調査の際に検出された祭祀遺構に関連する可能性も考えられるが、積極的にそれと認定する根拠に乏しく、ここでは竪穴住居跡に含めて報告する。

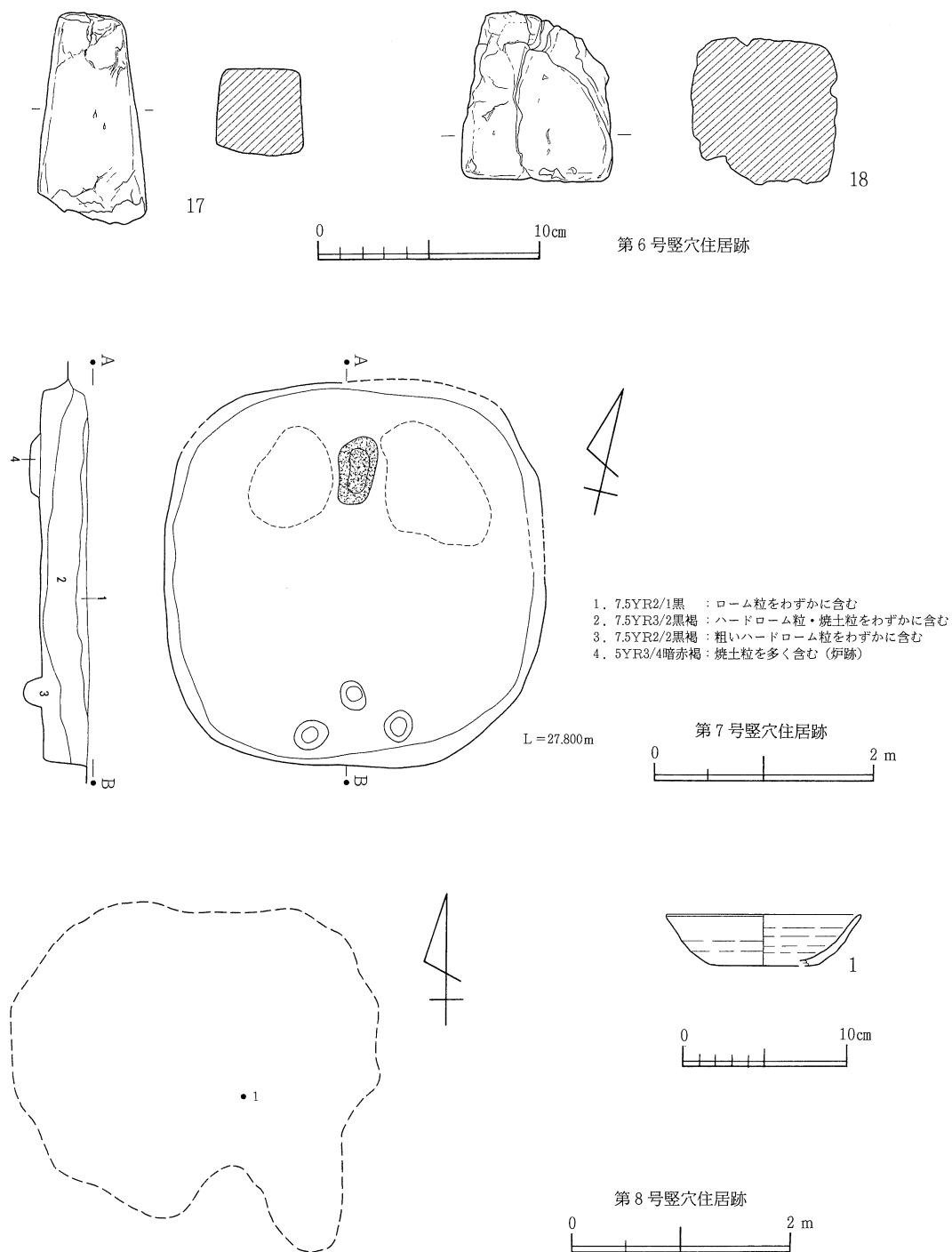


1. 7.5YR3/2黒褐：ハードローム粒・焼土粒をわずかに含む
2. 5YR3/2暗赤褐：粗いハードローム粒・焼土粒をやや多く含む
3. 7.5YR3/2黒褐：粗いハードローム粒・砂質粘土をやや多く含む、炭化材も混じる
4. 7.5YR3/3暗褐：粗いローム粒を少量含む
5. 7.5YR3/3暗褐：粗いハードローム粒をやや多く含む
6. 7.5YR3/4暗褐：ハードロームブロックを多く含む
7. 7.5YR3/3暗褐：ハードロームブロックを少量含む（貼床）
8. 7.5YR3/3暗褐：褐色土・粗いハードローム粒をやや多く含む
9. 7.5YR3/2黒褐：粗いローム粒・炭化材を少量含む

第7図 第4・5号竪穴住居跡・出土遺物



第8図 第6号竪穴住居跡・出土遺物



第9図 第6・7・8号竪穴住居跡・出土遺物

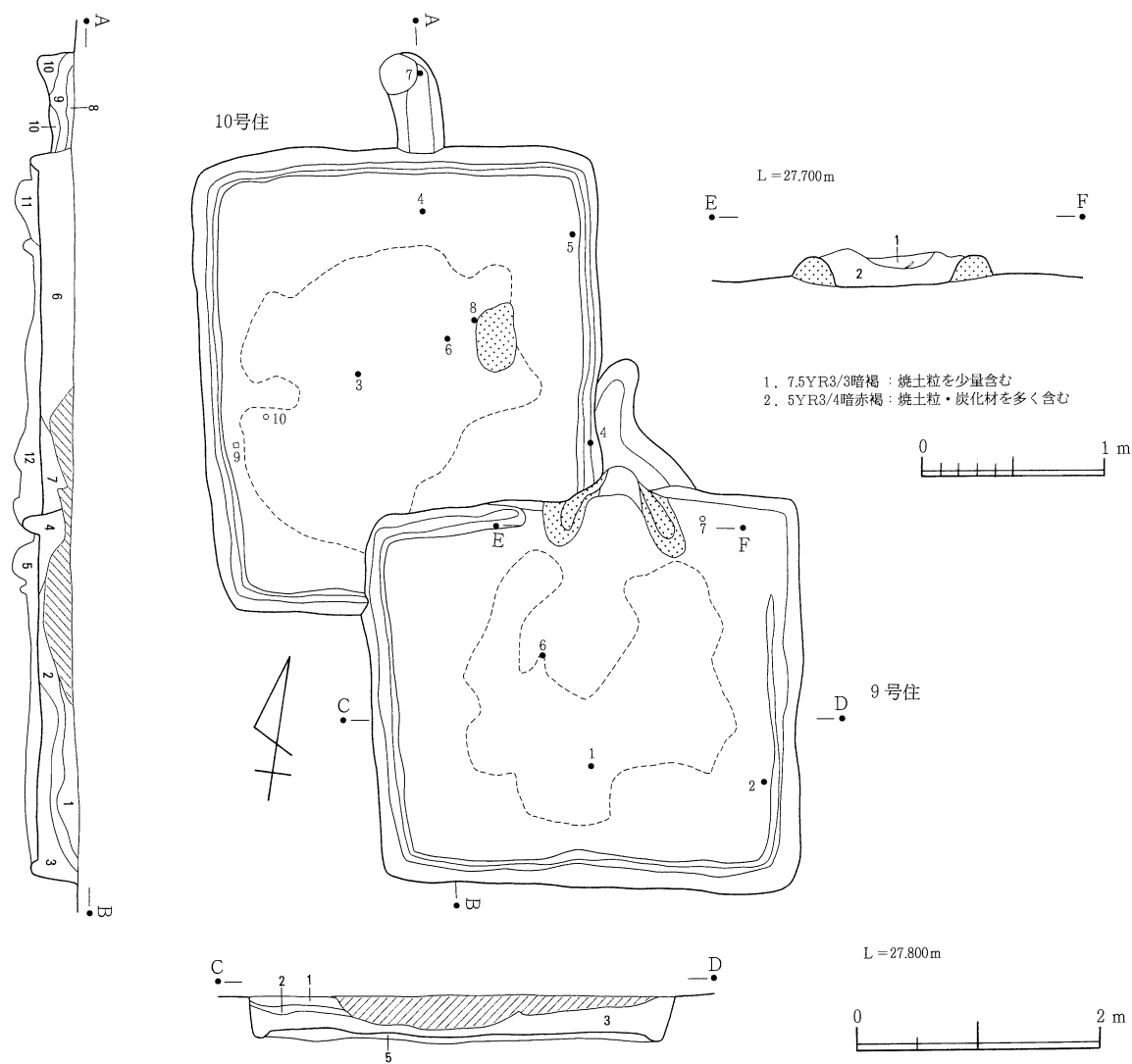
第9号竪穴住居跡(第10図)

調査時遺構番号 017号 遺存状況 第10号竪穴住居跡を切る。重機による掘削を受ける。

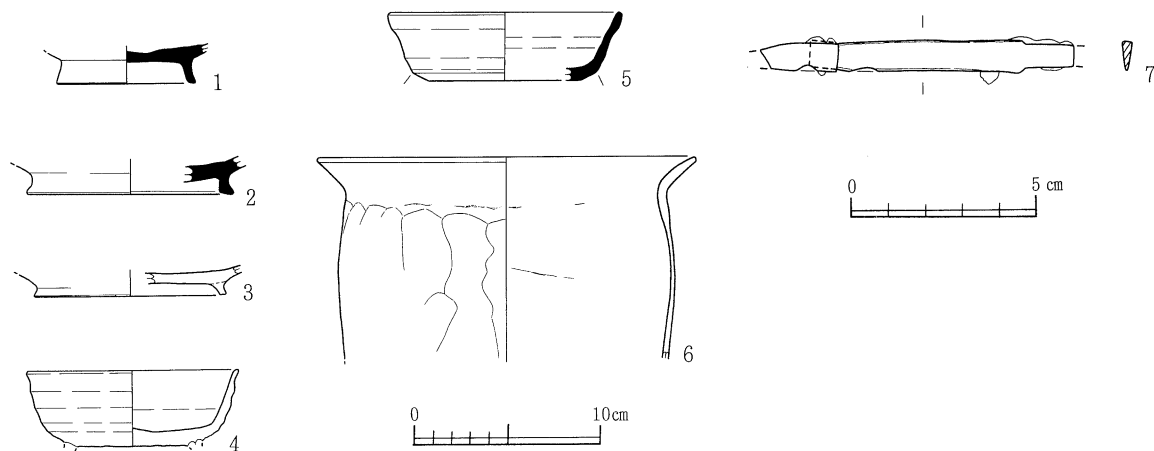
位置 中央東寄り 規模 3.24×3.44m・壁高0.36m 平面形態 やや横長の方形

主軸方位 N-9°-W 周溝 幅4~8cm・深さ2~7cm。 柱穴 検出されない。

床面 ハードローム中にあり、貼り床。攪乱が及ぶが、中央部付近は硬く踏み締められる。



- | | |
|-------------------------------------|---|
| 1. 7.5YR3/3暗褐：ハードロームブロックを少量含む | 7. 7.5YR3/3暗褐：ハードロームブロックをわずかに含む |
| 2. 7.5YR2/2黒褐：ハードロームブロックをわずかに含む | 8. 7.5YR3/2黒褐：砂質粘土ブロック・焼けた内壁材を少量含む（カマド） |
| 3. 7.5YR3/4暗褐：粗いハードローム粒をやや多く含む | 9. 7.5YR3/3暗褐：炭化材・焼けた内壁材を多く含む（カマド） |
| 4. 7.5YR3/2黒褐：砂質粘土粒・焼土粒を少量含む | 10. 7.5YR4/3褐：白色粘土を多く含む（カマド） |
| 5. 7.5YR3/3暗褐：粗いハードローム粒を少量含む（貼床） | 11. 7.5YR3/3暗褐：砂質粘土ブロック・ハードロームブロック・焼土粒をやや多く含む（カマド掘り方） |
| 6. 7.5YR3/2黒褐：砂質粘土ブロック・焼土粒・炭化粒を少量含む | 12. 7.5YR2/2黒褐：ハードロームブロックを少量含む（貼床） |



第10図 第9・10号竪穴住居跡・出土遺物

カマド 北壁やや東寄り。白色粘土を主体とする両袖を検出したが、明瞭な火床面は認められない。

遺物 カマド内を中心に土師器・須恵器が出土するが、小片が主体である。5の刀子は折れた先端付近が刃部に銹着する。現存長70mm+21mm・幅7.5mm・厚さ3mm・重さ5gを測る。1・6が床面、4がカマド内、2が覆土中層からの出土である。

第10号竪穴住居跡（第10・11図）

調査時遺構番号 018号 **遺存状況** 第9号竪穴住居跡に切られる。 **位置** 中央東寄り

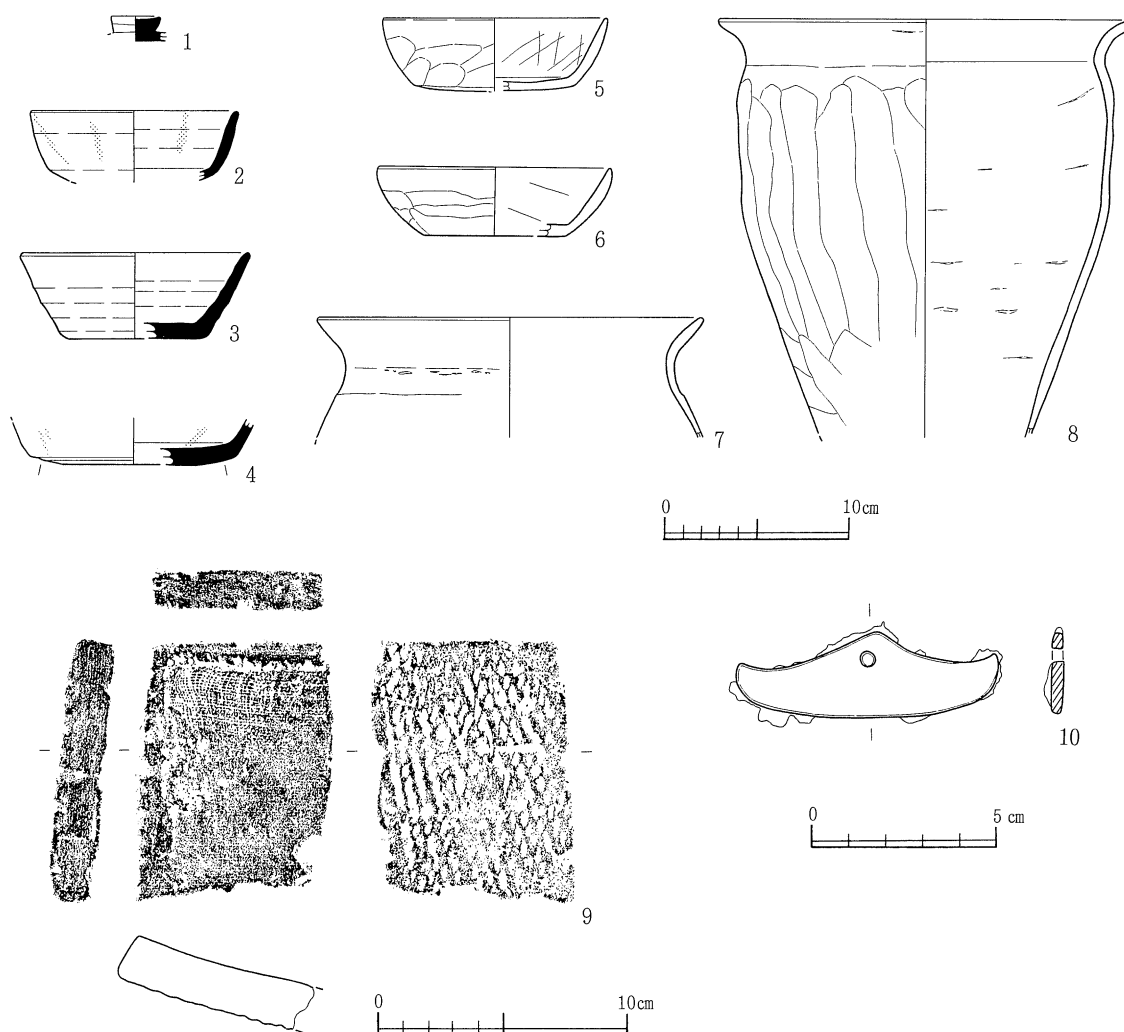
規模 3.80×3.26m・壁高0.34m **平面形態** 縦長の方形 **主軸方位** N-10°-W

周溝 幅4～8cm・深さ3～10cm **柱穴** 検出されない。

床面 ハードローム中にあり、貼り床。平坦で、中央部付近は硬く踏み締められる。

カマド 北壁やや東寄り。煙道部のみの検出で、本体は完全に取り除かれる。

遺物 遺構全体に見られるが、出土量は少ない。10は火打金で全長70mm・幅23mm・厚さ3mm・孔径4mm・重さ18.2gを測る。1・6・8が床面、7がカマド煙道部、その他は覆土中層からの出土である。



第11図 第10号竪穴住居跡出土遺物

第11号竪穴住居跡（第12図）

調査時遺構番号 016号 遺存状況 完存 位置 中央東寄り

規模 3.46×3.36m・壁高0.39m 平面形態 方形 主軸方位 N-78°-E

周溝 幅4～10cm・深さ3～6cm 柱穴 径30cm・深さ29～38cmを測る壁柱穴を検出。

床面 ハードローーム中にあり、貼り床。平坦で、中央部はやや硬く踏み締められるが、周縁部は軟弱。また、わずかに灰の分布が見られる。

カマド 東壁やや南寄り。遺存状態は悪く、両袖基部を検出したが、明瞭な火床面は認められない。

遺物 遺構全体から土師器の破片が多く出土し、皿が出現する。3・8～11が床面、その他は覆土中層からの出土である。

第12号竪穴住居跡（第13図）

調査時遺構番号 080号 遺存状況 第1号土坑を切る。完存するが掘り込み浅く、壁は不明瞭。

位置 南東隅 規模 3.58×3.60m・壁高0.14m程度 平面形態 不整形

主軸方位 N-7°-W程度 周溝 幅6～18cm・深さ5～10cm。西壁側のみ検出。

柱穴 検出されない。

床面 ソフトローーム中にあり、貼り床。平坦で、中央部付近を中心にやや踏み締められる。

カマド 北壁中央。遺存状態は悪く、両袖の基部と火床面が検出されたのみである。

遺物 カマド周辺部に集中して見られた。1は灰釉陶器碗で、三日月形の高台部を持つ。6の杯は底部に「福」の墨書がなされる。9・10は平瓦で、9は被熱して赤色化する。

2 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡（第14図）

調査時遺構番号 021号 遺存状況 第6号竪穴住居跡を切り、東側は調査区域外となる。

位置 北東寄り 構造 梁行3間×桁行4間の、東西棟と思われる方形の側柱建物

規模 梁行5m・桁行7m（現状） 柱間 梁行1.8m・桁行2.4m 主軸方位 N-9°-W

柱穴 径0.7～0.9m・深さ0.18～0.31m 遺物 柱穴内から土師器の細片がわずかに出土した。

第2号掘立柱建物跡（第14図）

調査時遺構番号 005・022号 遺存状況 第1号古墳を切り、ほとんどが調査区域外となる。

位置 南西隅 構造 不明 規模 不明 柱間 2.7m 主軸方位 N-3°-W程度

柱穴 径0.9m程度・深さはP1が0.58m、P2が0.38m

遺物 P1から1の灰釉陶器碗の口縁部破片が出土した。

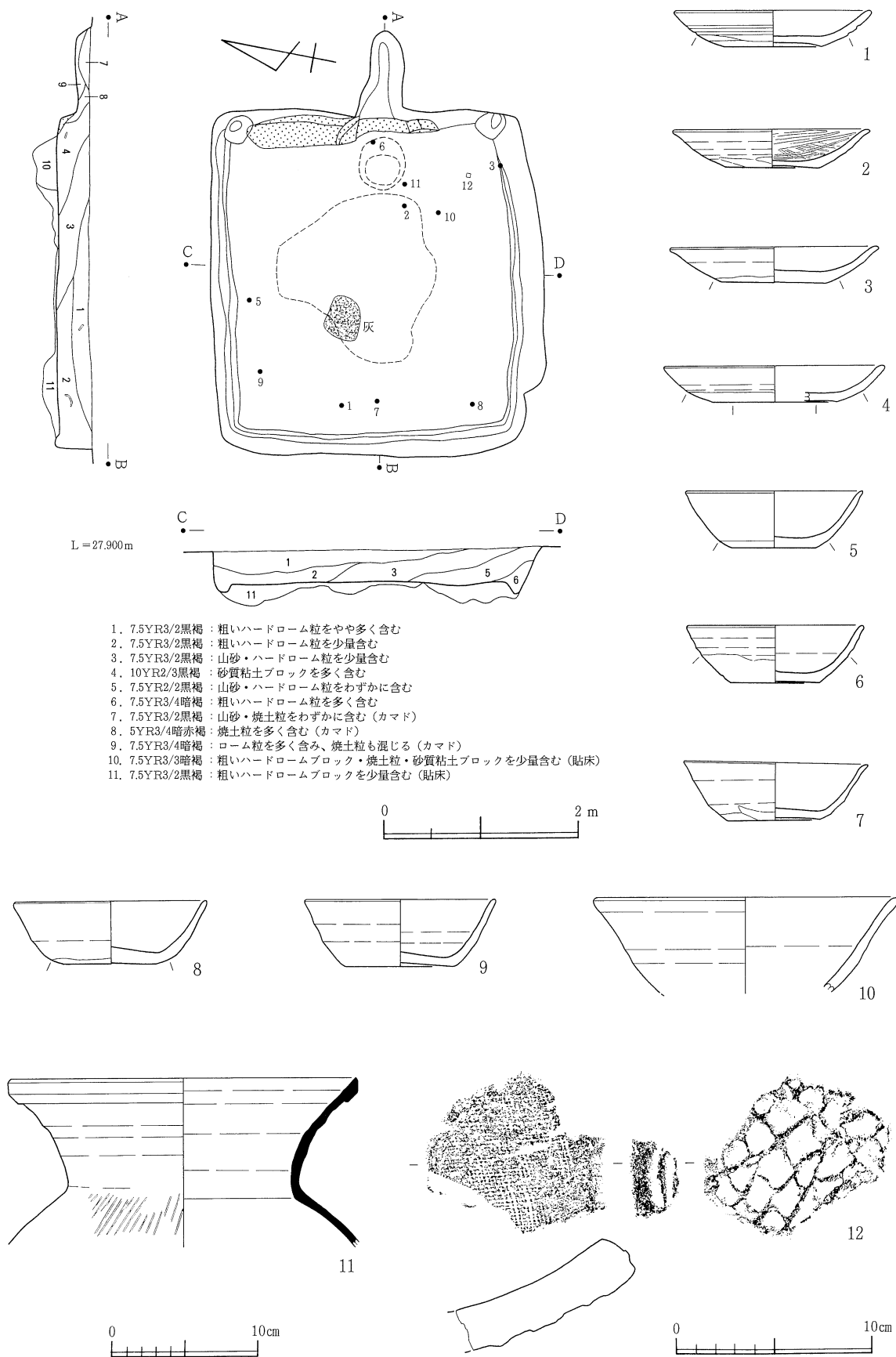
備考 当初、土坑として調査を行ったが、掘り方と覆土の状態から、掘立柱建物跡の可能性が高いと判断した。南側に隣接するE地点までは遺構が広がらないことから、東西棟と考えられる。

3 土坑

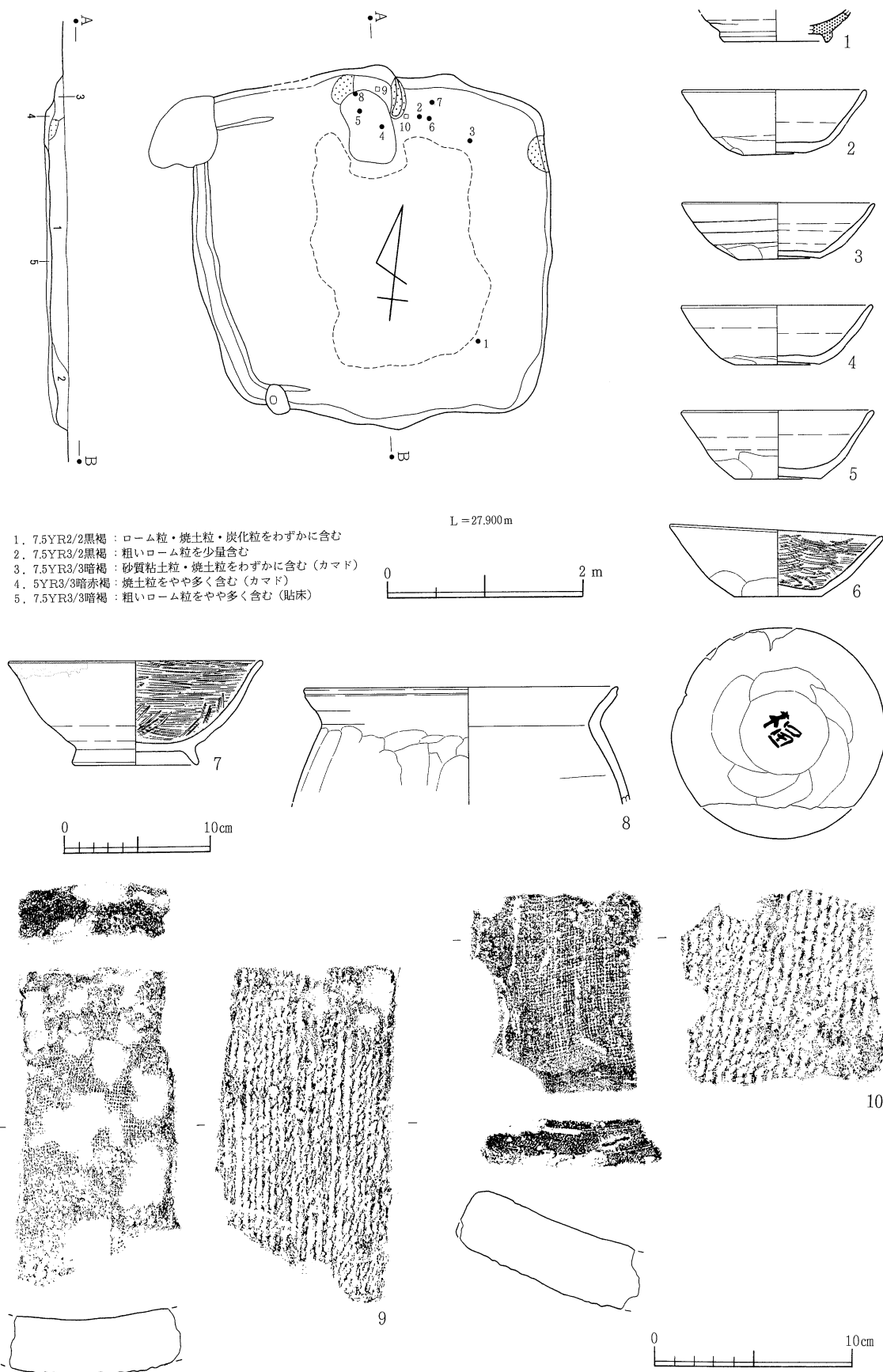
第1号土坑（第15図）

調査時遺構番号 119号 遺存状況 第12号竪穴住居跡に切られる。

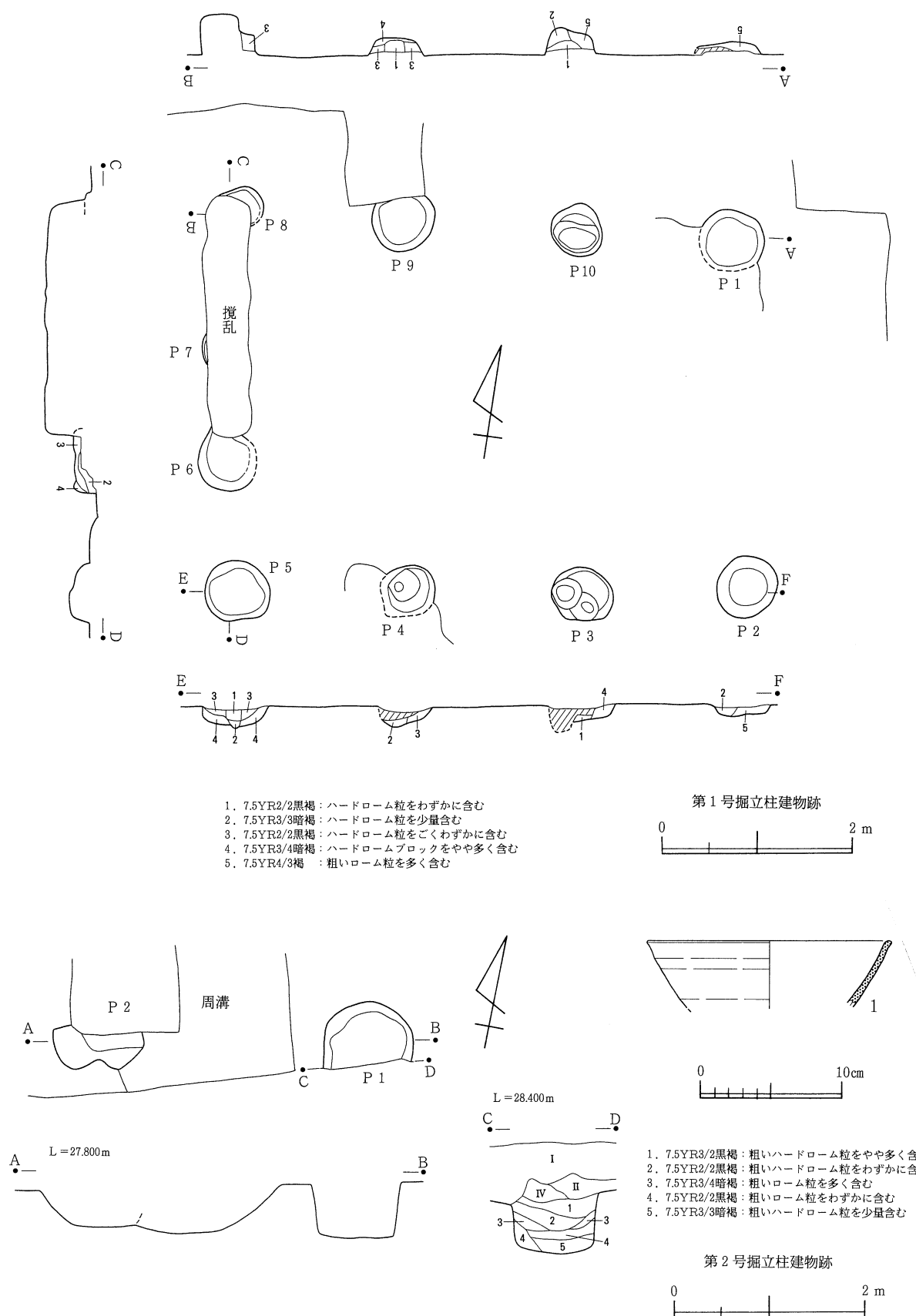
位置 南西隅 規模 1.48×0.76m・深さ0.82m 平面形態 長方形



第12図 第11号竪穴住居跡・出土遺物



第13図 第12号竪穴住居跡・出土遺物

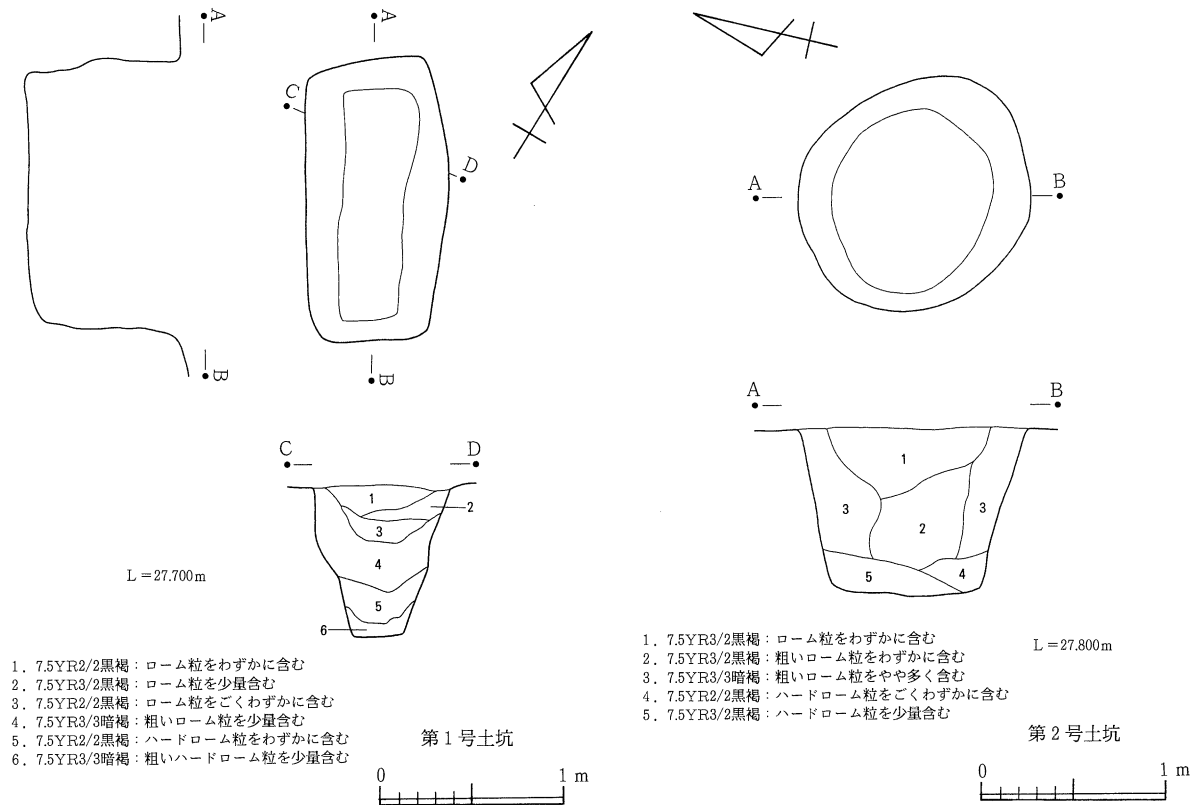


主軸方位 N-60°-E 遺物 出土していない。 備考 陥し穴と思われる。

第2号土坑（第15図）

調査時遺構番号 004号 遺存状況 完存 位置 中央西寄り

規模 1.28×1.14m・深さ0.77m 平面形態 不整円形 遺物 出土していない。



第15図 第1・2号土坑

4 古墳

第1号古墳（第16図）

調査時遺構番号 006号 遺存状況 第8号竪穴住居跡・第2号掘立柱建物跡に切られる。

位置 中央南隅 構造 円墳 規模 墳丘径10.9m・周溝径14.7m

周溝 幅1.5～2.0m・深さ0.26～0.58m 遺物 周溝内から土師器の細片がわずかに出土した。

備考 周溝西側の覆土中層から、馬の臼歯が出土した。エナメル質部分のみが残存する。植立状態を保って出土しており、頭部の存在が推定される。また、確認面からの周溝幅を考えれば、全身のままであった可能性も考えられる。土層断面に掘り込みは認められず、埋没途中に投棄されたものと思われる。自然死とは思われないが、古墳築造から時間差を持ち、葬送とどの程度関連するかは不明である。周溝を人為的に埋め戻した痕跡は認められないが、第8号竪穴住居跡・第2号掘立柱建物跡に切られることから、少なくともこれらの遺構が形成された時期までには、すでに墳丘も削平されていたことは明かである。帰属時期については出土遺物が少なく明確とならないが、本古墳を含む稲荷台古墳群は5世紀初頭ないし中頃～7世紀中頃にかけて形成されたものと考えられており、馬骨を伴

う県内の古墳も5世紀末～7世紀にかけて見られるようである。

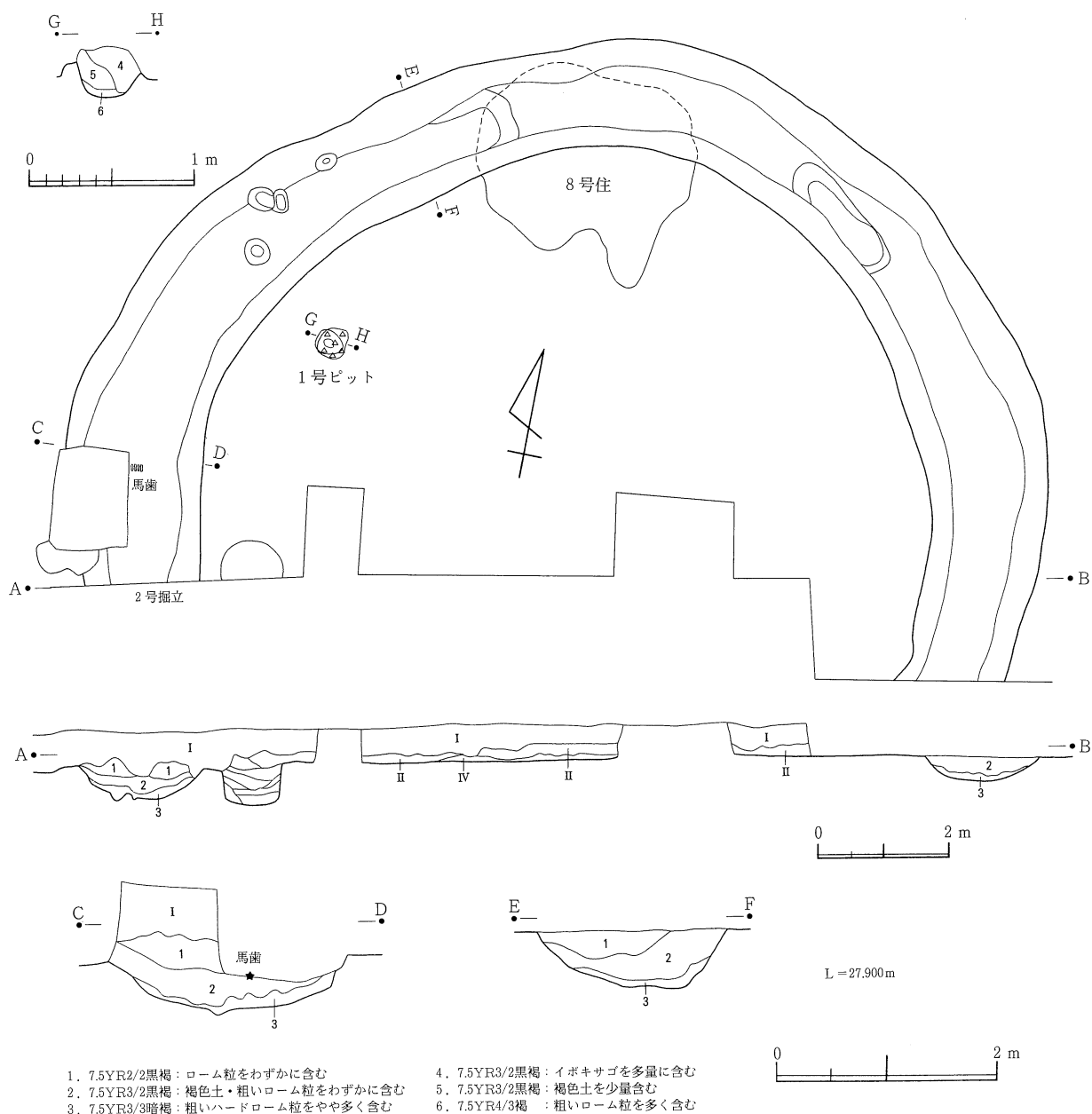
5 ピット

第1号ピット (第16図)

調査時遺構番号 118号 遺存状況 第1号古墳と重複する。 位置 南西寄り

規模 径0.4m・深さ0.2m 平面形態 不整円形 遺物 自然遺物のみ出土する。

備考 貝ブロックはイボキサゴ1,570、アラムシロ29、ウミナ属8、オオタニシ1、シオフキL8・R16、ハマグリL8・R7、アサリL3・R2、マテガイL1・R4で構成される(集計可能個体のみ)。伴出遺物はなく、古墳も旧表土下まですでに削平されているため、新旧関係・帰属時期ともに不明である。



第16図 第1号古墳・第1号ピット

6 遺構外出土の遺物

縄文時代（第17図）

1・2は半截竹管を用いて文様を描く、前期後半の諸磯a式土器である。1は半截竹管による平行沈線文を施し、沈線間に爪形文を施す。2は縦位に配された刺突文を軸に、乱れた上弧肋骨文が施される。3は後期中葉の加曽利B2式の粗製土器である。矢羽状沈線文を施し、口縁部直下と胴部には指頭押圧を有する粘土紐が巡らされる。1・2は第11号竪穴住居跡東側、3は第3号竪穴住居跡東側からの出土である。

弥生時代（第17図）

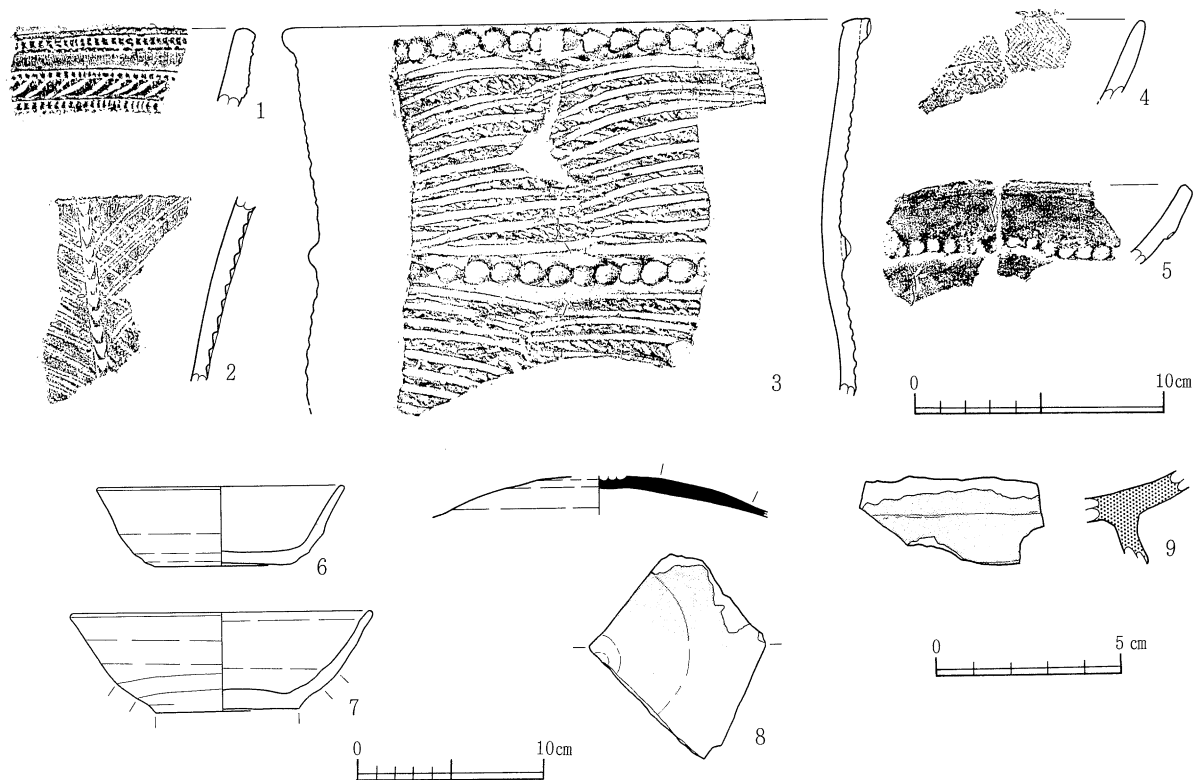
遺物量は非常に少ない。4は鉢の口縁部破片で、口唇部から口縁部に羽状縄文を施し、S字状・Z字状結節文によって区画される。5は壺の口縁部破片で、折り返して肥厚した口縁部下端に、棒状工具による押捺を施す。いずれも後期後半の所産で、第1号古墳周溝内からの出土である。

奈良・平安時代（第17図）

8は転用硯と思われる須恵器蓋で、天井部の1/4が遺存する。天井部内面は擦られて平滑となり、部分的に赤色顔料が付着する。9は今回の調査区において唯一検出された緑釉陶器で、器面には薄く施釉され黄緑色を呈する。8は第3号竪穴住居跡北側、9は調査区中央西壁付近からの出土である。

小 結

今回の調査では、当初予想に比べ、掘立柱建物跡と施釉陶器の検出数は少なかったが、遺構の展開や変遷を捉える上で、新たな資料が追加されたことは、大きな成果と言えよう。国分寺台土地区画整理事業地分については本格的な整理作業が行われておらず、今後の成果が待たれるところである。



第17図 遺構外出土の遺物

第 3 章 喜多仲台遺跡

調査方法

今回の調査区は、市道改良工事に伴い、平成4年度に調査が実施された地点の北側約300mに位置する。ここでの調査では平安時代初頭を中心とする遺構が検出されている。調査は、対象範囲内に任意に設定した基準杭をもとに、2×4mを基本とする確認トレンチを設け、遺構の有無と性格を把握した。また、不明確なものについては、トレンチの拡張・掘り下げを行った。

調査区における基本層序は、Ⅰa層表土、Ⅰb層褐色土、Ⅱa層黒褐色土、Ⅱb層褐色土、Ⅱc層黒褐色土、Ⅲ層ソフトロームである。現地表面からソフトローム上面までの深さは1m程度を測り、平安時代の遺構はⅡa層・縄文時代の遺構はⅡc層中に形成される。

遺構と遺物

調査の結果、縄文時代中期後半の竪穴住居跡3軒・土坑2基、平安時代の竪穴住居跡1軒・掘立柱建物跡1棟・土坑1基が検出された。主な遺構はすべて台地縁辺部から確認されており、深い谷筋に沿うようにして展開するものと考えられる。

遺物は遺構周辺を主体に出土する。1は加曾利EⅡ式の深鉢で、やや摩滅した複節LRLを地文に、口縁部文様帯には渦巻文と楕円形区画文、胴部文様帯には3本一組の沈線による磨消懸垂文を施す。他の縄文期の遺構もこれと同時期の所産である。2の杯の口縁部には油煙と思われる炭化物が付着する。3・4は高台付椀で、4は内面と口縁部付近に黒色処理を施す。平安時代中頃に比定される。1



第18図 喜多仲台遺跡周辺地形図

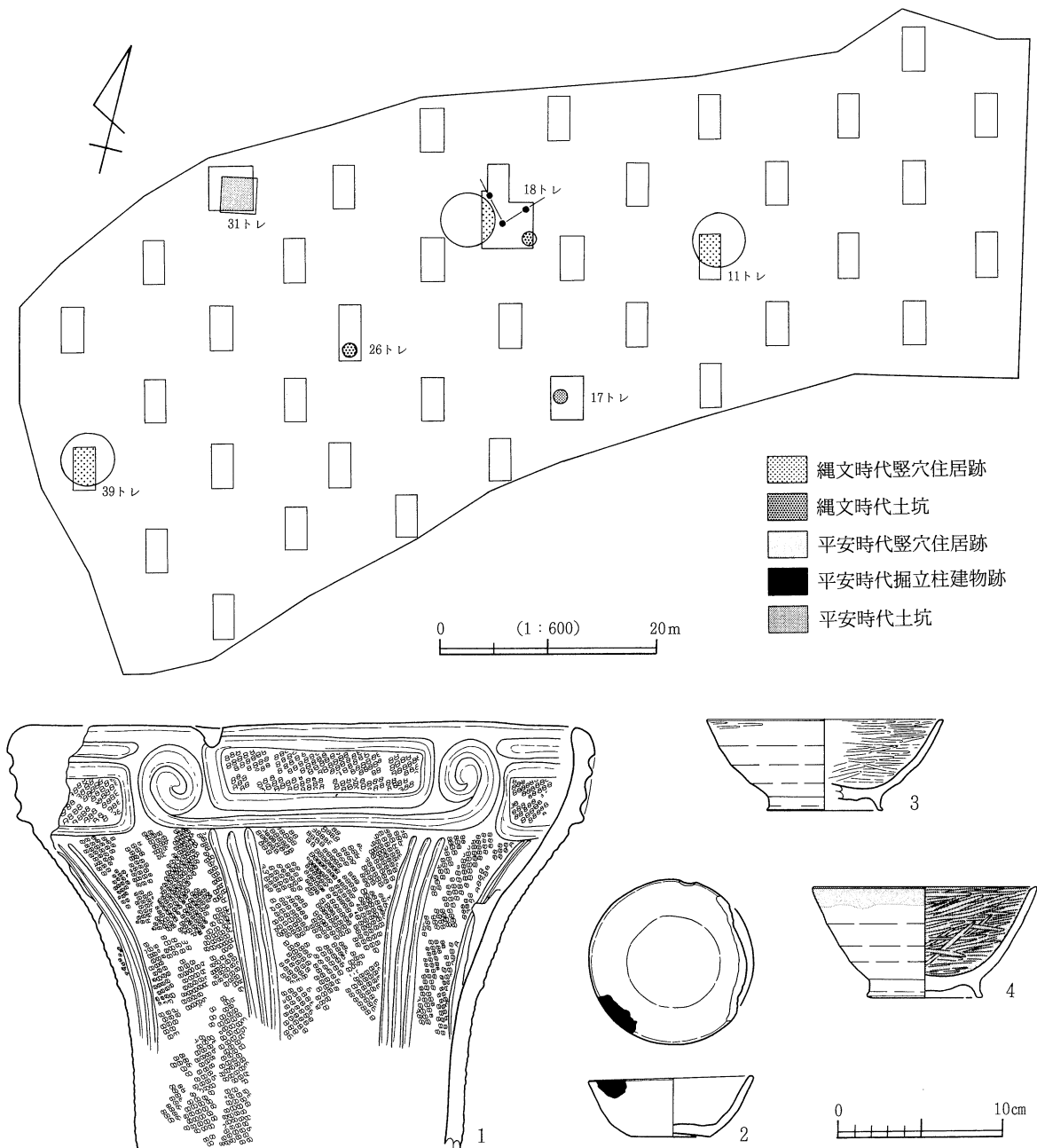
は11号、2～4は31号トレンチ検出の竪穴住居跡からの出土である。

小 結

縄文時代の竪穴住居跡は3軒検出されたが、調査区の眼下に広がる谷の幅は狭く急峻で、出土する遺物の時期も限定されるため、大規模な集落は構成せず、存続期間も短いものと思われる。

平安時代の竪穴住居跡は、墨書土器と豊富な鉄製品が検出された平成4年度調査区の遺構に比べ、時期が下るようであるが、先の調査時に高い比率で検出されたのと同様に、火災住居であった。

調査区東側の段丘面にも遺物が散布しており、遺構の展開が予想されるが、今回のように単独あるいは少数で検出される遺構の性格についても、周辺集落との関係を含め、今後さらに検討をしていく必要がある。



第19図 喜多仲台遺跡遺構配置図・出土遺物



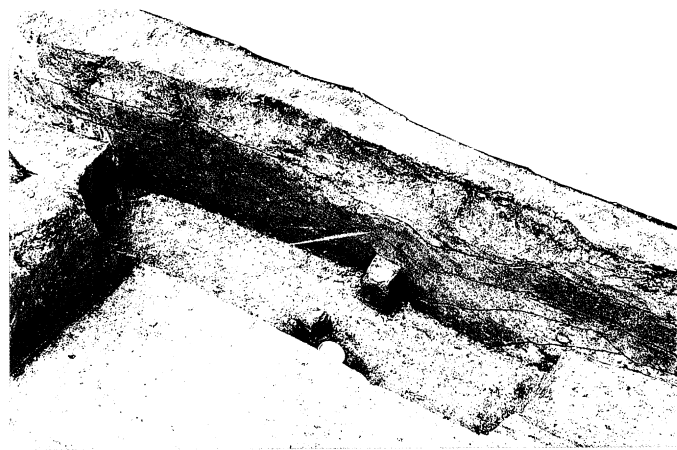
調査前近景（宅地部分）



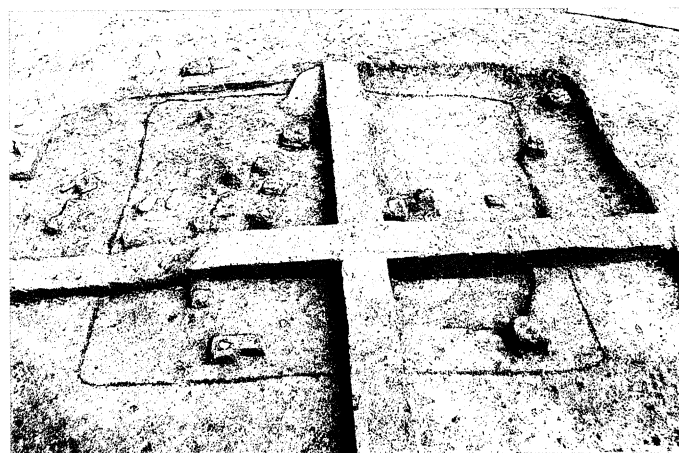
調査前近景（宅地撤去後）



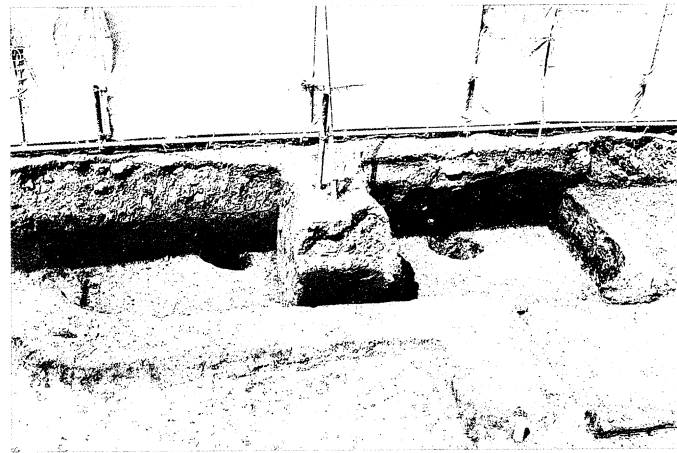
第1号竪穴住居跡



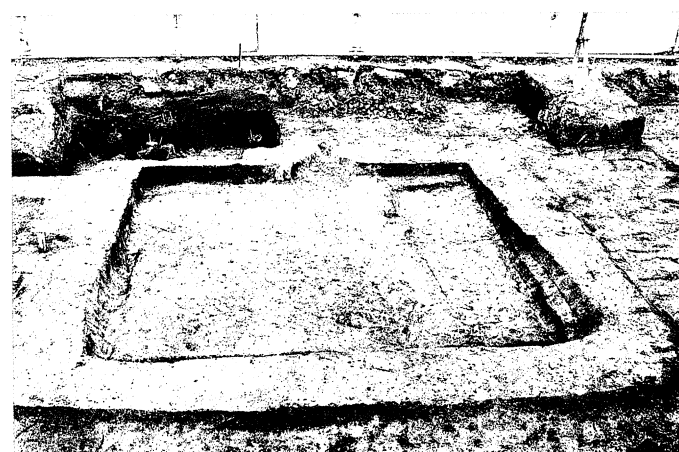
第2号竪穴住居跡



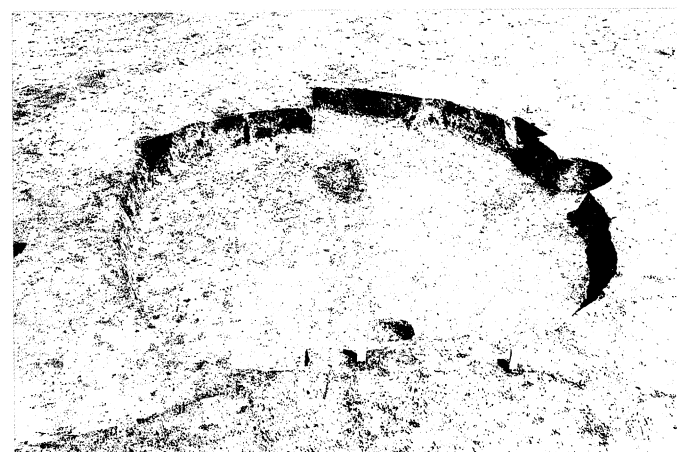
第3号竪穴住居跡



第5号竪穴住居跡



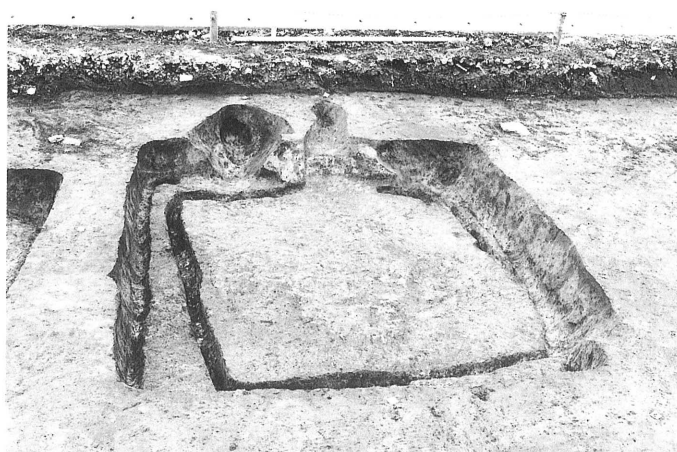
第6号竪穴住居跡



第7号竪穴住居跡



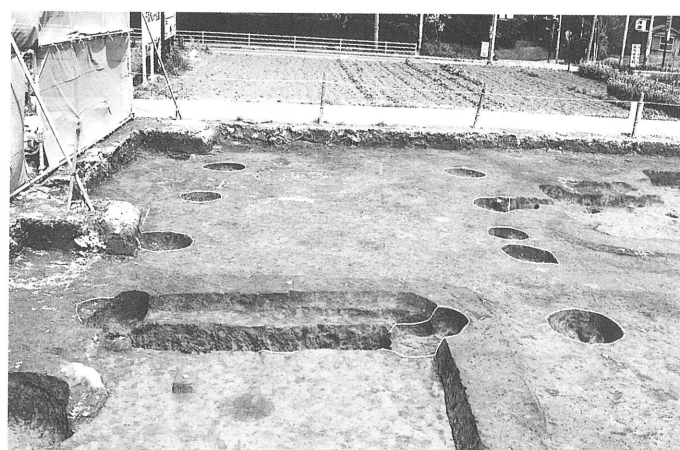
第9・10号竪穴住居跡



第11号竪穴住居跡



第12号竪穴住居跡



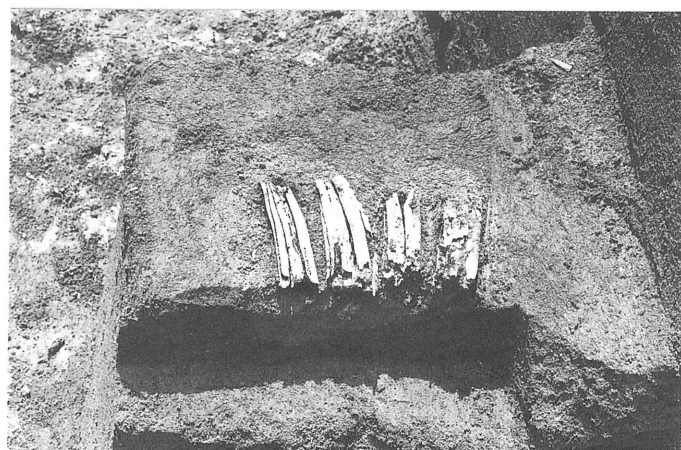
第1号掘立柱建物跡



第1号古墳



第1号古墳馬歯出土状況



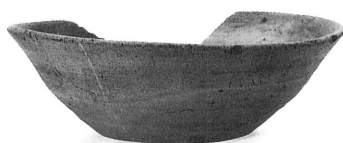
第1号古墳馬歯出土状況



調査区全景



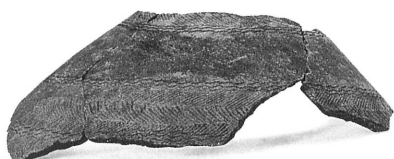
第 1 号竪穴住居跡



第 2 号竪穴住居跡



第 3 号竪穴住居跡



第 4 号竪穴住居跡



第 5 号竪穴住居跡



第 6 号竪穴住居跡



第10号竪穴住居跡



第11号竪穴住居跡



第12号竪穴住居跡



第 5 号竪穴住居跡



第10号竪穴住居跡



第 5 号竪穴住居跡



第12号竪穴住居跡



第 5 号竪穴住居跡



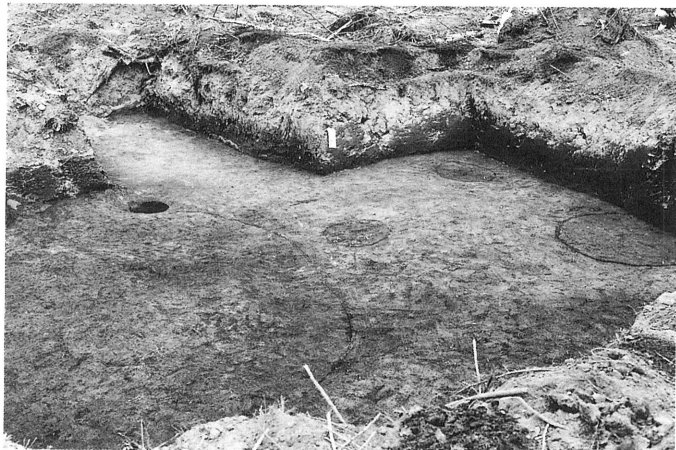
第12号竪穴住居跡



調査前近景



11号トレンチ



18号トレンチ



31号トレンチ



11号トレンチ



18号トレンチ



11号トレンチ



18号トレンチ



31号トレンチ



31号トレンチ



31号トレンチ

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいせいじゅういちねんどいちはらしないいせきはくつちょうさほうこく							
書名	平成11年度市原市内遺跡発掘調査報告							
副書名	稲荷台遺跡・喜多仲台遺跡							
巻次								
シリーズ名	市原市内遺跡発掘調査報告							
シリーズ番	第13冊							
編著者名	鶴岡英一							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1,489番地				TEL 0436-41-7300			
発行年月日	西暦 2000年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
いなりだいいせき 稲荷台遺跡	ちばけんいちはらし 千葉県市原市 やまだばし 山田橋3-4-11ほか	12219	セ290	35° 30′ 3″	140° 7′ 38″	19990407～ 19990511	719㎡	宅地造成工事に伴う埋蔵文化財調査
きたなかだいいせき 喜多仲台遺跡	ちばけんいちはらし 千葉県市原市 きた 喜多567-1の一部ほか	12219	セ305	35° 29′ 46″	140° 11′ 27″	19990830～ 19990908	340㎡	土砂採取に伴う埋蔵文化財調査
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構		主な遺物		特記事項	
稲荷台遺跡	集落跡	縄文前後期 弥生後期 古墳後期 奈良・平安	縄文前後期土坑2 弥生後期竪穴住居跡2 古墳後期円墳周溝1 奈良・平安竪穴住居跡10・掘立柱建物跡2		縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、布目瓦、墨書土器、鋤子、火打金、刀子、馬歯		官衙施設と考えられる稲荷台遺跡E地点に隣接し、同時期遺構の展開と未発見の古墳の存在が明らかとなった。	
喜多仲台遺跡	集落跡	縄文中期 平安	縄文中期竪穴住居跡3・土坑2 平安竪穴住居跡1・掘立柱建物跡1・土坑1		縄文土器、土師器、須恵器		これまで調査例の少ない村田川中流域の様相の一端を確認した。	

平成11年度市原市内遺跡発掘調査報告

平成12年3月10日 印刷

平成12年3月15日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

市原市能満1,489番地

発行 千葉県市原市教育委員会

市原市国分寺台中央1丁目1番地1

印刷 三陽工業株式会社

市原市五井5,510-1番地